ISSN 0911－0291

西郊民俗

第二六四号

令和五年（二〇二三）九月

過疎集落における周期的祭礼の行方 ……滝沢智宏 1
―福島県大沼郡金山町上横田の熊野神社渡御祭―（二）
鏡渭覚書 ……久野俊彦・小池淳一 15
―近世会津の真言僧と陰陽道―
上野浄名院と令和の八万四千体地蔵 ……林京子 17
普美地蔵を尋ねて ……清水邦彦 21
雑報 …… 24

西郊民俗談話会

西郊民俗談話会会則

一、本会は西郊民俗談話会と称する。

二、本会は会員相互の連絡を保ちながら、民俗学の研究を推進することを目的とする。

三、本会は、次の事業を行う。

（1）会誌『西郊民俗』等の発行。

（2）研究会等の開催。

（3）その他。

四、本会の会員は本会の目的に賛同して入会の手続をとったものとする。

五、本会の会員は会費として年額二、〇〇〇円を納入するものとする。

六、本会は会務の執行のために委員若干名を置き、うち一名を代表委員とする。委員の選出は総会において行い、その任期は二年とする。

七、本会は必要に応じて顧問を置くことができる。

八、本会は少くとも毎年一回の総会を開催するものとする。

九、この会則の変更は総会の決議による。

『西郊民俗』投稿案内

『西郊民俗』は年四回（三・六・九・十二月）に刊行しています。本会会員であれば、どなたでも投稿することができます。民俗学に関する報告・論説・記事であるならば、いかなる地域のものでもかまいません。論考・調査報告・資料紹介・資料翻刻・問題提起等、原稿の長短に関わらずお寄せください。短報も受け付けています。

投稿に際して次の点に留意してください。

一、投稿方法

できるだけ電子データ原稿でお願いします。本文・写真・図表を収録したCD・メモリースティック等のデータメディア郵送、またはメール送信でお送り下さい。そのプリント紙をともに郵送して下さい。メール送信でも、プリント紙は郵送して下さい。もちろん手書き原稿も受け付けています。

二、写真・図等

写真・図等は、電子データの本文に貼り付けないで、写真一点ごとの別ファイルにしてください。

三、校正

執筆者校正は、初校を郵送しますので返送して下さい。執筆者校正は初校のみといたします。注の付け方、文法上の整理等、本文の体裁について、編集上の調整をする場合があります。

四、『西郊民俗』PDFのインターネット公開

二五八号から、西郊民俗談話会のホームページにおいて、会誌の発行後一年を経過した時に、PDFによるインターネット公開を行います。今後の投稿に際して、インターネット公開を了承した上での投稿をお願いします。既刊のバックナンバーのインターネット公開については、今後検討していきます。

五、原稿送り先　編集担当

久野俊彦　〒329-0433　栃木県下野市緑四－六－七

Eメール　hto4sano@yahoo.co.jp

『西郊民俗』バックナンバー案内

既刊分の会誌の販売価格は一部五〇〇円です。在庫分は二四九号から受け付けています。会務担当宛お申し込み下さい。

過疎集落における周期的祭礼の行方

―福島県大沼郡金山町上横田の熊野神社渡御祭―（二）

滝　沢　智　宏

第四章　渡御祭にまつわる語りと記憶

本章では、渡御祭に関わってきた人々の語りをまとめ、語る人の立場による渡御祭の捉え方の違いと、渡御祭と今後の上横田をどのように考えているのかに注目する。その際、どの時代の渡御祭を経験したのかによる語りの違いを見ていく。渡御祭は、上横田の在り方と強く結びついているため、住民が経験し記憶している渡御祭の語りから、上横田の姿が見えてくるからである。

第一節　役員経験者の語り

昭和三〇年代以降の渡御祭に多く関わり、祭礼の楽しさが出てきた頃を経験している世代は、昭和一〇年代以前生まれの住民である。彼らは、上横田における渡御祭の位置づけが変化し、旧戸と新戸がさほど意識されなくなってきた渡御祭を経験している世代である。また、自身も区役員として準備に携わり、渡御祭の経験を下の世代に伝えてきた世代でもある。現在は区役員を引退し、渡御祭の準備に直接関わることはなくなった。さらに同世代が年々少なくなっており、昔の渡御祭を知る貴重な存在でもある。

彼らの語りには、渡御祭に限らず、上横田の社会の変動や演芸に精通した人が多いことなども強調されていた。かつての上横田の姿を知る上でも、彼らの経験や語りは重要であり、その経験や記憶に基づいて、今後の上横田を考えていることが、語りから窺うことができた。

一、A氏（昭和一〇年代生まれ、男性）

経歴　渡御祭での役割：御旗月天

運営：実行委員会役員、実行委員長

A氏は上横田の旧戸の出身である。渡御祭での役割はA氏の父が長年担い、A氏自身が担うようになったのは平成になってからである。それでもA氏は、かつて旧戸のみで行われていた頃の渡御祭を経験しており、当時の上横田や祭礼の様子が、現在と大きく異なっていたことが語りから窺える。また、自身が区長のときは、実行委員長を務めた経験を持つ。

A氏の家は旧戸の中でも分家した家のため、比較的新しく、富裕層が区長や役員を務めていた頃は、A氏の家の者が区の運営などに直接携わることはできなかったという。当時は富裕層と一般住民の差がはっきりしていたとの語りが多く、今との違いが強調されていた。渡御祭についても、役職についている富裕層が主導で話し合いを進め、随身や御色旗なども裕福な家が担うことになっていたと語った。

【語り一】二〇二一年一二月一五日　A氏

（　）＝筆者捕捉、（……）＝中略、太字＝筆者強調）

（昔の区の運営が旧戸の一部の人で行われていた話から）

筆者：渡御祭の時も上のユルリ（イロリ）にいるような人たちが旗持ったりとか、ある家の親戚筋から右大臣・矢大臣出したりとかだったんですか。

A氏：昔はな、人いっぱいいる頃はそうだったんねえのかな、だんだん人少なくなってきたからな、その年齢に適する人がいれば、その人にやってもらうようになってきたようだな。昔はこめら（子どもたち）いっぱいいたからな、どこの家も。

筆者：その右大臣・矢大臣できるようなのは、羨ましいとかは。

A氏：**羨ましいっちゅうか、仕方ねえちゅうか、そういう諦めもあった**

と思うな。あそこは金持ちだからっちゅう考えがあったからな。

渡御祭については、一部の家々が中心となって行われていたことが分かる。また、A氏が幼少期に随身を担えなかったことは仕方ないと感じていることから、当時の上横田の社会的な構造が浮き彫りになる。また、語りでは、頻繁に富裕層と一般住民の差が大きかったと述べていた。しかし、その後の語りでは農地解放と横田鉱山の開山が大きな転機だと語っていた。戦後の政策による農地解放は農家の自作地増加をもたらし、上横田の社会構造においても大きな転換点を迎えた。また、昭和三〇年代には上横田地内に横田鉱山が開山した。これは現金収入が手に入りやすくなったことに加え、外部からの労働者を含む人口の増加を招いた。渡御祭に新戸の住民が参加し始めたのは、昭和三〇年代ころからであり、上横田の社会構造の変革と結びつく。A氏自身の経験は、上横田の社会状況が大きく変わっていく最中だとA氏が自覚していることが、語りからうかがえた。

二、B氏（昭和一〇年代生まれ、男性）

経歴　渡御祭での役割：白張り、山車、出仕、先払い

運営：実行委員会役員

B氏は、上横田の新戸出身である。かつては区の役員や社総代を務めていたが、現在は引退している。また、自他共に認める芸能好きで、演芸大会で踊りを披露したり、他地区の歌舞伎に役者として参加したりしてきた。

B氏の語りには、渡御祭に限らず、上横田では昭和二〇年代頃から演芸大会や歌舞伎、豊年踊りなどが頻繁に行われてきたことが語られ、渡御祭をはじめとした祭りの良さが強調される。演芸大会は公民館横の広場で開催されるが、以前は上横田のいたる場所に舞台や練習場所があったという。それについてB氏は、「上横田の歌舞伎は大したもんだ」「上横田の歌舞伎は有名だったから」と演芸の良さを語った。また、B氏は過去二回、神輿渡御で先払いを務めている。B氏が先払いを務めることで、渡御祭の醍醐味を感じている様子が語りから伝わってくる。そして、自身が感じた渡御祭の楽しみを、若い世代にも実感してもらいたいとの思いがある。

【語り二】二〇二一年六月二四日　B氏

（B氏が子どもの頃から現在にかけての渡御祭の語りで）

B氏：現代になって俺が（先払いを）やって、やるようになって色々やるようになったんですよ。にぎやかな祭り良いし、何とも言えねえんだよ祭りの、〇〇アンニャ[1]の家のメエ（前）ってくるに、御神輿担いで、稲穂あれの（実っている）時、そうしていると、こんだテレビ局なんか来ると、先回って撮ったりするべ、ああいう雰囲気はなんともいえないなあ。（……）

（他地区の祭礼と比較する語りで）

B氏：まだ上横田はいっぱい若いてえがいるから継続できっ（できる）と思うよ。何とも言えない雰囲気だわ、稲穂があれになって。こういったがなを、大変な中でも継続していって、継続するにしても若い人がいないとできねえ。上横田の場合はみんな他から応援してやってるからいけどな。だから上横田の場合はできるだけ御神輿担いで本当に祭りってわけでやってる。本当はここらの祭りは厳かにやる祭りなわけだ。（……）

（昭和五三年度の渡御祭について）

B氏：やっぱり本当にあれは婦人会が催しやってから、盛り上がりがうんとよくなった。それはやっぱりいっぱいいるからな、若い衆がいないとできないことだから、こういうときも小学校のてい（小学生）が早く帰ってきたりして、先の御神輿に、先にクマ[2]、〇〇さんが寄贈したク

写真６．昭和53年度渡御祭　山車
子どもたちが山車を引いている。出典：氏子提供

写真７．昭和53年度渡御祭　山車
山車の他に婦人会による鼓笛隊も練り歩き、これまでで最大規模の渡御祭だった。出典：氏子提供

マをつけて（載せて）、リヤカーさつけて御神輿が引っ張ってわっしょいわっしょい（……）こんだいつだ、できれば来年か。来年あたりはコロナもあれになるべから、七年にいっぺんなわけだが、やんねえのはおもしろくないから、山入（地区）の歌舞伎もそう通り、一回止めるとなかなかダメだから。

（渡御祭が旧戸だけで行われていた頃から現在にかけて）

B氏：あと本当分かる人いないから、だんだんいなくなるから、絶やさないで覚えていてほしいからな。伝承だわな、若いがなが応援してもらえれば、記録もしてもらえれば、すっとことはねえから、やっぱこの部落の発展が盛り上がっていく。だから他からも来てくれるし、昔は（C氏）がなとか村回り、各部落をどんちゃん騒ぎして、ここからその日の、見に来て花挙げてくれやるから、一回面白い思いをするとみんなわかっているから来てくれやるし、楽しみに。今の区長様は見事なもんだ、芸の達者だから、やっぱ我が好きだから、ああいう風に盛り上げられるんだよな。俺たちもそうだ、やっぱ区長やってもなかなかみんなの協力がないとできないから、だから今の区長は素晴らしいと思う。みんなで協力できる体制を取っているから上手くいくだわな。

B氏はここに収まらないほど渡御祭の記憶を語ってくれた。同世代のA氏とは異なり、上横田には演芸好きの人が多くいること、B氏自身も芸事を行ってきたことが語りで強調されていた。祭礼や芸の楽しさが語りから伝わってきて、筆者の知らない上横田の姿が明らかになった。特に、先払いを務めたときに感じる稲穂の描写は、渡御祭の楽しさを知るB氏ならではの語りだといえる。

B氏が経験した頃の渡御祭は、上横田に人が多くあらゆる世代が渡御祭に携わっていた。互いに馴染みのある者が多く参加していた渡御祭を経験しており、役員になってからも次の世代に自身の経験を伝えていった。役員を引退したB氏から見て、今の上横田にも若者がまだまだ多くいるから、渡御祭も継承できると考えているのだろう。そして、現在の区長であるF氏の働きを称えつつ、期待を寄せている。渡御祭や演芸が今よりも盛り上がっていた頃の上横田を知る者として、今後の上横田を担っていく若い世代に期待するB氏が語りから明らかになる。

後日、改めてB氏に話を伺いに行った。この時には、七年に一度の渡御祭が、六年間の空白期間を経ながらどのように継承されてきたのか、旧戸が中心となって渡御祭が行われていた時から現在までのことを尋ねた。

【語り三】二〇二一年九月七日　B氏

（担い手が旧戸のみから、新戸も含むように拡大してから）

B氏：昔は、はあ（神輿渡御の役割が）決まってたからや。その人（旧戸の人）が長く生きていれば長く分かる訳だが、そういう受け継ぎは特別はねえだよな。だいたい区長やった人は役員とかやってきているから

分かる訳だ、今はな。そうやって結局、区の役員てい（人々）が集まって色んなことやって受け継いでいく他ねえだよ。なんでもそうだけど、やっぱ知ったていから聞いといて、そして受け継いでおいて、みんなで集まって話をすれば、こういうことあったなって分かってくるようで、今なかなか（そういう場が）なくて。

筆者：事前に練習だとか、ないですかね。

B氏：そういうがなはほとんどねえだな、だから今度は練習はねえが話をしたり写真を見たりで、初めてお宮（熊野神社）さ行って支度してっちゅう感じだから。白張りとって担ぐ人だってみんな、最近はワラジの履き方が分からないわけだ、若い人は。**だから知っている人が教えて、そうして覚えておいて残しておくほかねえだよな**。だから白張りだって上（神社境内）さいって初めてワラジの履き方とか、そういうがなをみんな教えていくほかねえだよあな。

渡御祭の継承は、ここまでで述べてきたように、経験者から教え伝えていくことでなされてきた。準備の場でも渡御祭当日においても、経験者を含む役員を中心に教えられて、若い人は、その経験を次の渡御祭の時に役立てていく。新戸が担い手に加わってからも、渡御祭の詳細を知っているのは、これまで渡御祭を担ってきた旧戸の者だった。新戸であるB氏も上の世代から渡御祭のことを教わり、継承していくことができた。B氏曰く、実行委員会役員は七年経っても大きくは変わらないことから、渡御祭の経験が蓄積されていく、ということである。

渡御祭当日も、白張りのワラジの履き方や、供物の並べる順番、宮司に供物を渡す向きなど経験のない人は経験者から教わり、自身も経験することで覚えていく。六年間の空白期間があっても、経験を積み覚えている人から教わり伝えられることで、渡御祭の継承のサイクルが形成されてきた。一方で、これは、B氏が現役で人手が揃っていた頃だからこそ成立していた仕組みだといえる。現実は、旧戸新戸問わず、A氏やB氏の世代は少なくなってきている。現在の区役員に助言できる立場の人が減り、これまでの継承システムは維持できなくなっているともいえるだろう。

しかし、B氏は現在の区役員やその下の世代に期待している。これまでの渡御祭とは異なるにしても、町内で上横田は若い人が比較的多い。今はコロナ禍で話し合いの機会を設けることもできないが、機会さえあれば、知っている人から渡御祭を伝えて継承できると、B氏は考えている。それは、B氏自身があらゆる世代と共に渡御祭を開催した経験を積んできたからだといえる。上横田の過疎化はこれからも進んでいくと考えられるが、若い人に渡御祭の経験を伝えることができるB氏の存在は欠かせない。

三、C氏（昭和二〇年代生まれ、男性）

経歴　渡御祭での役割：白張り

運営：実行委員役員、実行委員長

C氏の家は旧戸で、長年C氏の父が家の役割である赤の御色旗を渡御祭では持っていた。C氏はA氏やB氏よりも下の世代で、自身が渡御祭で役割を担うようになったのは、比較的最近である。C氏が実行委員長を務めた平成のことの渡御祭について尋ねたところ、これまでより規模を縮小せざるを得なかった、当初演芸大会は行わないつもりだったが結果として行うことになった、との語りがあった。七年ごとの祭礼なので、近年は開催の度に人の減少幅が大きく、何度も経験を積むことは難しくなったという。しかし、何とかその年ごとにできる範囲でやりくりをして渡御祭を開催してきた。

【語り四】二〇二一年九月九日　C氏

（実行委員長を務めた渡御祭での変更点に関する話から）

C氏：誰がどれ持つとか、鏡持つ人とか、右大臣矢大臣の家とか、昔は決まっていたの。全部決まっていた。**ただ、今そんなこと言ったって人がいないべ、だからなんとかやりくりして、たとえば町営住宅の人なんか関係ないってことはないが、そういうていにも協力してもらわないとだから**。そういう人に小さい子どもがいれば、協力してもらって出てもらうって形でな。だから、行列歩いていくときに旗持った（……）、赤とか白とか黄色とか黒とか、これとか持つ家が全部決まってたんだ。だけど、今、人がいないから、手空いている人、これ持ってくろーって話だから。

筆者：色々な方に話を聞いていると、やりくりしながら渡御祭の形は崩さないようにっていう話が多いです。

C氏：崩すのはいつでもできるから、なるべく崩さないようにっていう風にはしてんだ。ただ今年からだな、今年あたりは規模をがーんって少なくするしかないぞって話には区長となってんだ。昔と比べると二四、二五軒少なくなっているから。

C氏の語りはA氏やB氏とは異なり、上横田の現状について深く言及している。それはC氏が、渡御祭の準備段階において、中心となって経験を積んだ時期が平成に入る頃からだからだ。C氏が実行委員長を務めた渡御祭の時には、すでに人手が足りていなかった。たとえば、御色旗は招待客に持ってもらったほどだ。家ごとの役割は、御神鏡と御神刀がまだ残っいるが、いつまで維持できるか不透明である。C氏が経験してきた渡御祭は、B氏のようなあらゆる世代と楽しく行う渡御祭の側面よりも、人手をどう補っていくか、渡御祭を何とか開催しなければならない、との側面が強くなっているといえる。そして、区役員を退いた今でも、現役の区役員と話す機会が多く、過疎化の進む上横田において、今後どのように区の活動や渡御祭を行っていくべきかを考えているといえる。

ここまで役員経験者の語りを見てきた。それぞれの語りには、自身が経験し強く記憶している時代の様相が表れているといえる。A氏の語りには、渡御祭よりも、かつての上横田は今よりも経済的な格差が大きく、生活が厳しかったと記憶しているといえる。B氏は、A氏よりも少し後の時代で、芸能が盛んで渡御祭の規模も大きかった頃を記憶しており、祭礼の楽しみを強く感じている。そして自身の経験と同じように、今後も若い人がいるから、上横田は渡御祭を継承していけると考えている。

一方で、C氏はさらに下の世代ということもあり、人手が足りなくなってきた頃の渡御祭を経験している。ゆえに渡御祭の記憶も、人手の確保に苦慮してきた語りが主になる。C氏の語りは、次に述べる現役の区役員の語りと似ている点が多い。三人とも上横田で生まれ育ったが、時代によって経験している渡御祭が異なるため、語りにも差異が見られる。さらに、彼らの語りは渡御祭に限らず、当時の上横田の記憶でもある。A氏の記憶している旧戸が中心だった頃から、B氏の語る住民が沢山いて活気づいていた頃の上横田、そしてC氏が語る平成に入ってから区の運営や渡御祭で担い手が足りなくなってきた上横田の様相というように、住民が記憶しており、語ったことから、上横田の変遷が見えてくる。

第二節　現在の上横田区役員、実行委員会役員の語り

現在の区役員は、多くが昭和六二年度、平成五年度の渡御祭から携わっている人が多い。以降継続して渡御祭を担い準備から関わってきたが、それ以前の昭和五〇年代頃までと比べると、同じように継続して担っていく人数は減っている。次第に役員となり、中心となって渡御祭を準備

していく立場になった頃には、かつて渡御祭を教えてくれた上の世代が減少しており、高齢により彼らが渡御祭に関わることは難しくなっていた。これまでの渡御祭と同じような継承が困難だと明らかになってきた現在、今後の渡御祭を縮小、あるいは次で最後にするといった選択肢も生まれてきている。

一、D氏（昭和二〇年代生まれ、男性）

経歴　渡御祭での役割：唐櫃、大麻

運営：実行委員会役員、実行委員長

D氏は町内出身者で、二〇代のころに上横田に移住してきた。平成に入ってから区役員を務め、自身が区長の時に実行委員長として渡御祭の開催に尽力した。現在も区役員として年下の役員に助言する立場にいる。

昭和四〇年代、D氏が二〇代の頃の渡御祭は人がたくさんいて、若い人から高齢者まで沿道に出てにぎやかな渡御祭だったという。当時の渡御祭は旧戸のみによる渡御祭だったので、移住者のD氏の家には、神輿渡御での役割がなかった。

平成に入りD氏が区役員を務めるようになったころ、当時の実行委員会では、旧戸の人たちが老人クラブの代表として実行委員を務め、助言を行っていたという。祭礼当日、D氏は裏方としての活動が多かったという。

後に、D氏は上横田出身以外で初めての区長となる。しかし、実行委員長を務めた渡御祭では、人口が減ってきて氏子だけでは行うことができなくなっていた。そこで人手不足を上横田出身で全国にいる若い世代を祭礼に呼び、人手を補おうとした。

【語り五】二〇二一年六月二二日　D氏

（D氏が若い頃と比べて人が減り、上横田にいる人だけでの開催が困難になったことから、実行委員長を務めた渡御祭のことについて）

D氏：どうしたのかというと、これ（渡御祭）は七年に一回は間違いなくやってきたと。それは途中から、何も自分たち（が）集落にいなくなっても、ここ出身の若い人たちはどこかにいるはずだと。（……）招待状ちゅうか、お手伝いのお願いのようなのを各家庭からね、連絡してもらって。（……）参加してもらって、盛り上げていただければ。これ、このまま本当にね、**残ってる人たちだけでやろうとなると、なかなか何にもできなくなっちゃうということがやっぱり危惧される。**（……）七年に一回といえども全国になかなか見れないような祭りが、金山の上横田にはあるんだよってことを、それも日本中に散らばっている人に呼び掛けて、七年に一回は田舎に来て祭りを楽しんでもらおうというような、そういうような思い、だから人はここにいねえけど、ここ出身の方はいる訳だからっちゅうことで、その時の発想だったんだな。

（昔から今の上横田について）

D氏：昔は区長やる家って二十六戸の、本当に旧家の（聞き取り不良）のような時代もあったんだけど、今はそんなこと言ってもなかなか（区長を務める人が）いないんで。（……）二十六戸が上横田の本村だったんだけどね、今は二十六戸よりも町営住宅とか、我々のような（移住してきた）世帯の方が多くなったからな。**だから、ある意味上横田はもう都市化して、いろんな人たちが集まっているといったような、だから金山でも意外と開けた色んな人が住んでいる集落になって。**（……）

D氏が区役員として準備に携わるようになったころ、旧戸の者が老人クラブの代表として実行委員に加わり、会合で役割分担を指示していた。上の世代から教わりながら渡御祭の数多くを経験したが、自身が実行委員長を務めるころには過疎化が進み、若かった頃とは異なる集落の状況だった。そこで上横田出身で集落から移住した人々に協力を依頼し、無事に人手が足りて神輿を担ぐことができたという。当時から氏子のみで

の開催は困難になるだろうとの見通しがあり、新たな担い手を増やしていこうとした工夫が見られる。しかし、継続して渡御祭に携わる人材を確保するまでは至らなかった。

D氏は自身が上横田に移住してきた立場でもあり、今の町営住宅のように、移住者が多くいることが上横田の特徴だと述べている。これまでもそうだったように、移住者を受け入れ、区の一員として運営側に取り込みながら、区を運営しているのが、上横田の特徴だといえるだろう。D氏の言葉を借りれば、上横田は「都市化」していったといえる。D氏が上横田出身以外で初めて区長を務めたことからも、上横田が存続してきた理由の一端が垣間見える。移住者のD氏が上横田区の運営と、渡御祭での担い手になったように、次の担い手を育てられているかというと、現状は難しいといえるだろう。経験を積むことのできる人手を確保することの難しさを、区役員の語りを聞いて改めて実感する。

令和三年度の渡御祭については、規模を縮小して行う想定で考えていたが、コロナ禍で見通しが持てず中止に至ったという。ただ今後については、せっかくの渡御祭で、七年に一度なのだから、縮小せずに最高の環境で行いたいとD氏は語っている。

二、E氏（昭和二〇年代生まれ、男性）

経歴　渡御祭での役割：唐櫃、白張り

運営：実行委員会役員

E氏は、D氏と同じく町内出身の移住者である。平成になってからの渡御祭では、実行委員会役員として準備、運営に携わった。現在も区役員として区の運営に携わっている。

【語り六】二〇二一年九月六日　E氏

（令和三年度の渡御祭が次年度以降に延期になったことについて）

E氏：延期になっているからな。今年中止にもしてないから、来年コロナでも収まればできる、やりたいって言うでしょきっと。**やりたいって言う、だからね、七年ごとのせっかくの部落の行事だから、絶やしたくはないっていう。**

（E氏が今後、祭礼の規模を縮小せざるを得ないのでは、と語ってから）

筆者：ずっとやっていると、今までの祭りと比べて、ここは削らないといけないけど、ここは変えたくないってのはありますかね。

E氏：そうだな、あるな。その、でも、**でもなあ、変えないとできなくなっちゃうんだよな。本当は変えたくないところもあんだよな。**昔から刀持ったとか、鏡持ったとか。その持ち物、その人が年取ってもうダメだってなったら、変えなきゃなんねえかんな。

（……）

筆者：今年はできなくなった理由だとか、流れだとかは。

E氏：今年は、コロナ騒ぎでできなかったわな。それはしょうがないんだけども、それだけでできなかった部分と、人がいなくてできなかったわけではなかったんだよな。縮小してもやった方がいいって人がいたから、それは別にどうってことはなかったんだけど、コロナがなあ一番だわな。あとは他から呼んできてもな、心配な部分があんだな。

これまでの渡御祭でも、変更せざるを得ないときには変更してきたことと、今後もそうなっていくだろうとの見通しを持つE氏であるが、渡御祭は絶やしたくないとの考えも持っている。またD氏と同様、七年に一度の渡御祭に特別感を感じているともいえるだろう。コロナ禍の影響もあるが、担い手が少なくなっている上横田の現状を、どのように乗り越えていこうか、迷っている印象も語りから感じられた。

三、F氏（昭和三〇年代生まれ、男性）

経歴　渡御祭での役割：白張り

運営：実行委員会役員

F氏は上横田出身で、昭和前期に分家した新戸である。祭礼の開催予定だった令和三年度に区長のF氏が実行委員長を務めるはずだったが、コロナ禍により中止の判断を下している。

F氏の語りからは、前回開催の平成二六年度から令和三年度までの七年間で、上横田がどのように変化してきたか、そして今後の渡御祭と上横田に対する危機感が読み取れる。

長年、F氏の父が家に与えられた神輿渡御の役割を担っていた。F氏自身は、平成になってから役割を担うようになった。またF氏自身が区役員として渡御祭の運営に携わるようになった頃から、徐々に人手が足りなくなり、上横田に居住してきた人に手伝ってもらうようになった。開催年にちょうど町営住宅に暮らしている住民に協力を依頼してきたが、入れ替わりが激しいため、複数回参加した住民は少ない。新戸とは異なり、町営住宅の住民は、実行委員として準備に関わることはなく、神輿渡御にのみ参加する（してもらう）形の担い手だといえる。また、彼らは氏子ではないので、渡御祭に参加する義務はなく、実行委員会からも参加を依頼するにとどまる。

F氏は、町営住宅の住民らが協力してくれたことは助かったと語る。一方で、彼らにとって、渡御祭が「自分たちの祭り」だとの実感はなかったのではないかと推測している。区長として、過疎化の進む区の現状をどう見ているかが、F氏の語りから読み取れる。

【語り七】二〇二一年五月一〇日　上横田区長　F氏

（町営住宅の住民が区の共同作業や渡御祭にどのように関わっているかについて）

F氏：（……）（町営住宅の住民が）永住するかどうかってのがあるし、普請ってのは話し合って出られるようにしたんだけど、これから人が少なくなれば（……）**お祭り以前に自治組織が成り立たないんじゃないかと俺自身が危惧している部分がある。**

（令和三年度の渡御祭の開催是非についての話から）

F氏：町営住宅ができてからも、そもそも上横田に住んでいる人がね、いないもんね。（昔は）少なからず集まって遊べたんだけど、（人が）いないし。（F氏世代にとっての）親世代もいないし、過疎化、高齢化、それに尽きちゃうと思う。それにコロナが来てダブルパンチみたいな。思った以上に厳しい。七年ごとに見ていると、びっくりするくらい。（……）（区役員などと）話した中でもやっぱり難しいよねっていう、**自分たちが活動するだけでも精いっぱいになってて、日頃の自治活動で手いっぱいってことは、他にやることはできないってわけだよね。**今の役員やっている人は二〇年近くやっているわけだし。（……）祭りができるかっていうと、実行委員会には婦人会とか老人クラブとか各種団体から代表が出ていたんだけど、組織が作れないから、役員と兼任になっているから。**変わった、特にこの七年で変わった。町営住宅の人は頼めば出てくれるけど、引っ張っていく人たちが厳しいし、町営住宅の人が役員って訳でも無いし、氏子でもないし、手伝って楽しかったで終わっているのよ、**それはそれでいいんだけども。

F氏は、今後過疎化がさらに進行していけば、現状の自治組織を維持できないかもしれないと危惧する。渡御祭に限らず、毎年行われる普請などの共同作業や定期的な役員会において、すでに人手不足の影響が出ている。現在の区役員は、全員が各々働いていて、長年多忙な中で区の業務も行っている。実行委員会でも、役職の兼任が増え、実質的な人数は減っている。現状では、毎年の区役員業務に加えて渡御祭の準備を行うことが難しくなっている。

過疎化が進む中で、町営住宅の住民には、移住して間もない人も多いが、区の共同作業への参加を呼び掛けている。しだいに渡御祭も準備の

段階から協力してもらうようになるかもしれない。ただ、継続して参加してもらい、担い手になっていけるかどうかは不透明だ。

そしてF氏が強く実感しているのは、上の世代の高齢化と過疎化である。F氏が渡御祭の準備に関わるようになった頃には、すでに助言してくれる立場にあった人が減り始め、渡御祭を含め、上横田を引っ張っていく立場にあった人が少なくなってきた。渡御祭の継続と、上横田の存続において必要なのは、経験豊富で集落を引っ張っていける存在である。渡御祭の時だけ参加する担い手だけではなく、長年上横田で生活し経験を積んでいける担い手が必要なのだ、と語りから考えられる。

聞き書きを行ったのは、令和三年度の中止が決まる前だが、その時点で、人手不足とコロナ禍の二つの理由から、開催できても規模の縮小は免れないとのことだった。演芸大会は行わず神輿渡御だけにする、他地区での祭礼のように神輿をリヤカーに載せて渡御を行い、直会も感染対策から折詰の配布のみにする案もあった。そして、令和三年度が渡御祭を開催できる最後の年ではないかという話もあると語った。次年度以降に渡御祭を開催するかは決まっていないが、F氏としてはこれまでと同じ規模で渡御祭を行うことは厳しいと考えているようである。

以上、区役員の語りであったが、現在の区役員には、彼らの親世代が長年渡御祭の準備に携わっていたという人や、上横田出身ではなく移住してきた人が多い。彼らが区の運営や渡御祭に携わり始めたころは、経験豊富な上の世代から教えてもらい経験を積みながら、区や渡御祭のことを学んでいったと考えられる。しかし、自分たちが引っ張っていく立場になった今、これまでのように上の世代が渡御祭に携わることが難しくなった。また、下の世代も少なくなり、移住して間もない、継続的に参加できるか分からない町営住宅の住民にも協力を求めるようになった。だが、当日のみの参加に留まることが多く、準備段階の人手不足は否めない。D氏が実行委員長だったときのように、上横田出身者に手伝いを依頼することもあったが、渡御祭の継承において本当に欠かせないのは、経験を積み若い世代に教えることのできる人なのだといえる。しかしそうした担い手は年々少なくなり、これまでの継承システムが成立しなくなっている。F氏の「引っ張っていく人たちが厳しい」との言葉は、今の上横田を示している。今の役員世代は、足りない人手をどのように確保するかを常に意識される渡御祭を経験してきたため、語りも上の世代とは異なる。令和三年度は開催できなかったが、渡御祭は最後かもしれないとの選択肢が生まれるほど、上横田の現状が厳しくなっているのだと、区役員の語りから考えられる。

第三節　新たな担い手の語り

ここまでの語りは、渡御祭を中心になって担ってきた、上横田を引っ張ってきた立場による語りである。しかし、近年は渡御祭の担い手が拡大し、町営住宅の住民も渡御祭に携わるようになってきた。今後の上横田において、町営住宅の住民は重要な存在になると考えられる。また、渡御祭における女性の役割は、料理に関連することに限られる。女性に渡御祭のことを尋ねようとしても、料理以外のことは分からないと言われることが多かった。それほど渡御祭は、歴史的に男性が中心になって継承されてきたといえるだろう。しかしながら、祭礼の料理については、女性が代々担ってきた役割である。女性から見た渡御祭、上横田の語りもまた重要である。

一、G氏（昭和五一年〈一九七六〉年生まれ、男性）

経歴　運営：記録係

G氏は、他県の出身者である。金山町に移住する際、町営住宅の多く

建つ上横田を町から紹介され、住むことにした。区の共同作業である普請は、G氏にとって昔から上横田に暮らしている方と話す機会で楽しいという。

平成二六年度の渡御祭には記録係として携わっているが、これは役員から頼まれて引き受けたそうだ。記録係は渡御祭の様子を撮影し、その映像は写真やDVDとなって、公民館に保管されたり希望者が購入したりしている。前年度の例大祭の時に、「来年（平成二六年度）は派手にやるよ」と区役員に言われたが、詳細は分からないまま渡御祭を迎えたという。渡御祭当日は随身を務める男児や多くの参加者が映るように、さまざまな角度からの撮影を意識したという。役員から撮影前にどう撮影すべきかは言われなかったが、自分で考えながら臨んだそうだ。そして今後の渡御祭についても、G氏の立場から語ってくれた。

【語り八】二〇二一年一一月一五日　G氏

（今後の渡御祭について、町営住宅の住民らは手伝ってくれるだろうとG氏が語った後で）

筆者：（……）渡御祭も色々な方にお話を聞いてきていて続けてほしいって人もいれば、ちょっと人が減ってきていて難しくなってきているっていう人もいて。

G氏：そこが、これ私の勝手な考えですけど、岐路に立っているのかなと思っていて。**今の規模でやるか、少し規模を縮小してやるか、止めてしまうかっていう三つの選択肢があるんじゃないかなと思うんですよ。**で、物理的に無理になる、本当にどうやっても無理になるまではせっかくなので今の規模でやったほうがいいかなと、そこがちょっと話し合いだと思うんですけども。できれば、あんな派手にできるのって七年に一回でしょ。町営住宅の人は増えているけど、なかなか参加できない人もいるから。

区長F氏の語りにあるように、町営住宅の住民に対しては、人手が足りないため協力を依頼している状況である。担い手が旧戸のみだった時から、新戸が新たな担い手になり、上横田の社会的な範囲が拡大していったのとは異なり、移住して間もない、上横田での生活に十分慣れていない人々が、渡御祭を「自分たちの祭り」だと認識するのは難しいと考えられる。まして準備の段階からの参加ではないため、直前の準備から参加しても担い手としての意識は芽生えにくい。あくまでも渡御祭を担い手として関わるのではなく、手伝いとして関わるにとどまり、依頼する役員側からも、依頼される町営住宅の住民からしても、約半年間の準備期間をかけて渡御祭の準備を進めるのは厳しいと考えられる。

町営住宅の住民は入れ替わりが激しいが、普請など地域の活動に積極的に協力する町営住宅の住民は増えている。しかし、前回の渡御祭を経験したG氏は、上横田の現状と七年前を比較したときに、今後は現状維持や規模縮小といった選択を迫られている状況だ、との見解を持っている。G氏の視点は、実行委員として、担い手として渡御祭を運営していく立場とはまた異なった視点である。G氏も自身が移住者であるとの立場から、今後の渡御祭をどうしていくべきなのかは分からない、話し合いが必要だと語る。

二、H氏（昭和四〇年代生まれ、女性）

H氏は他県出身で、結婚して夫の実家のある上横田で暮らし始めた。これまでに三回の渡御祭を経験してきた。女性は主に渡御祭における直会で必要な料理を調理するが、若かったH氏はこの調理に直接関わった経験がないという。実際に調理していたのはH氏よりも上の世代で、H氏は皿を並べるなど会場の準備を行ったという。一方で、H氏は演芸大会の時に販売する焼きそばや焼き鳥などの屋台での調理に携わっていた。こちらは婦人会が中心に準備、調理、販売等を行っている。

【語り九】二〇二一年一二月五日　H氏
（渡御祭の準備で直会の料理に携わったか、の話の中で）
H氏：（……）でも、たぶん料理はした記憶があまりないというか、まだ上横田に働ける先輩方がたくさんいたんだよ、きっと。だから公民館に行った記憶があるけど、並べかた（皿や料理を並べる事）だけっていうか、全然台所、流し台に立つレベルじゃなくて。（……）Iさんが料理長で、料理頭はたぶん男の人なんだけど、実際に料理を仕切ったのはIさんで、みんながIさんに聞きながらやっていた記憶がある。で、自分（H氏）は具体的に料理をするほどまだ年齢も技術もなかったから、並べたものを上（公民館の二階）に持って行ったりとかお茶碗とかコップを並べるくらいしか、で（他の女性たちが）こんなことやってたのかあって思った。

I氏は、上横田ではA氏やB氏と同世代で、過去の渡御祭を知っており、助言等を行う立場にある人である。料理には女性しか携わらず、その中でI氏は実際に調理しながら、他の女性たちに料理について伝えていたと、筆者は考えた。しかしH氏曰く、I氏は次の渡御祭には高齢のため参加できない、という。令和三年度の渡御祭が中止になって、次回以降も見通しが持てない状況のなかで、渡御祭を経験できないこと、それにより分からないことが増えているという。渡御祭全体の継承と同様に、料理に関しても同様の継承システムであることから、経験できないこと、助言する立場にある人が減っていることが、今後の継承を困難にしているといえる。

町営住宅の住民が、今後、渡御祭に準備の段階から関わることができるかというと、難しいと考えられる。住民の入れ替わりも激しく、渡御祭に継続して参加できるのか分からないところが大きい。それでも人手不足は続くため、今後も町営住宅の住民の協力は必要だが、渡御祭の今後は、区役員などの引っ張っていく側の住民しだいだと考えられる。一方で、村落運営の面では、すでに町営住宅の住民が担い手として関わっている。G氏のように、普請に参加して住民同士の交流が楽しいという語りもある。いずれにしても上横田の現在を考える上で、町営住宅の住民は欠かせない存在である。

また、女性たちにとっても、渡御祭全体の準備を行う役員らと同じように、料理の方法や形式についての継承が渡御祭を通してなされてきた。しかし、女性の担い手も少なくなり、今後経験豊富な世代が関われなくなってくると、継承が途絶えてしまう可能性も考えられる。

第五章

第一節　上横田の歴史と渡御祭

上横田における渡御祭は、旧戸のみが担い手だった頃と、新戸も含めて担い手だと考えられるようになった頃で、大きく変わっている。前者の渡御祭は、旧戸の中だけで神輿渡御の役割分担が完結し、さらに一部の富裕層が準備を仕切り、神輿渡御では特定の役割を担うことができた。役割が旧戸に限られていたことから、旧戸のみが氏子で、旧戸の範囲が上横田の社会的な範囲であったといえるだろう。こうした渡御祭を担うことの特権性や、新戸との歴史的な違いの顕在化が見られたのが、昭和二〇年代頃までの渡御祭である。

その後、農地解放や横田鉱山での採掘が開始されたことで、自作農が増加し、現金収入を安定して得られるようになり、旧戸と新戸の経済的な格差がなくなり、区の運営においても民主化が進んだ。一部の旧戸のみだけが仕切るのではなく、選挙によって区長が選出されるようになった。そして上横田の社会的な範囲が、新戸まで含むようになる、すなわ

ち新戸も氏子として捉えられるようになると、渡御祭の担い手に新戸も含まれるようになった。だが、当時の若い世代が、上横田から都市部に流れるようになると、その親世代が継続して渡御祭に参加せざるを得なくなってくる。世代の中では経験が蓄積されるものの、継承する次の世代が少なくなり全体としては担い手が減少してきた。

そして、平成に入ってから継続して担ってきた世代が渡御祭に関われなくなり、新しく渡御祭を担っていく現在の区役員世代にとっては、同世代が少ない上に助言してくれる上の世代が消失したことで、渡御祭の継続が困難だと考えられるようになってきた。町営住宅ができて、移住してくる人々に渡御祭への協力を依頼するが、手伝いにとどまり、渡御祭を継承するまでには至っていない。歴代の神輿渡御役割の分担を見てみると、人数の規模としては大きな減少は見られないが、内実としては当日だけの参加者が増えており、準備から携わる担い手の減少には歯止めがかかっていない。令和三年度は中止になったため分からないが、もし開催されていたとしたら、人数を確保できずに、これまでの神輿渡御よりも大きく縮小していた可能性も考えられる。

第二節　渡御祭の記憶を継承・再構築する

第三章で述べた渡御祭の概要や変遷は、『渡御祭順序明細控』や近年の実行委員会の資料などの「記録」からまとめている。特に各時代の変遷については、日本や上横田の「歴史」とも関連している。歴史とは、「人間の記憶の中で最も重大な位置を占めてきた事実の集合」〔アルヴァックス一九八九：八六〕であり、連続する事実の集合に区分を設けて、固定化する。「記録」もまた、出来事や時代を文字によって表現し、対象を固定化する特性を持つ。渡御祭は開催される度に「記録」が作成されており、過去の渡御祭がどのように開催されたのかを確認することができる。

しかし、渡御祭はこれまで経験豊富な世代が次の世代に教え伝えることによって継承されてきたと、住民は語る。いくら詳細な「記録」が残っていても、慣習や細かな決まりなどの書かれていないことは、担い手の「記憶」を介して伝えられ、渡御祭が開催されてきた。準備から開催の過程を継続して経験することが、多くの担い手の間に共通の素地を生み、渡御祭に関する集合的記憶が構築されていった。そして、渡御祭の記憶を保持する集団＝区役員を中心とした氏子たちが、大変な準備を通して渡御祭を開催し、次の世代に教えていくことで継承がなされていった。七年に一度の頻度であっても、担い手の集団内に集合的記憶が構築されているからこそ、渡御祭は開催することができた。昭和三〇年代以降の渡御祭では新戸が担い手に加わったこともあり、より多くの担い手の間で、経験の蓄積、記憶の構築がなされていった。この頃の渡御祭に関わっていたのがA氏やB氏の世代である。特にB氏は、今の上横田には若い人が沢山いるから、継承していけると語った。こうした語りの背景には、B氏が経験した時代の渡御祭には、担い手が多くいたこともあり、その時の記憶を基に継承できると語ったのだと考えられる。

しかし、しだいに担い手は減り、人手が足りなくなっていった。それは、集合的記憶を保持する集団の規模が小さくなっていったことを意味する。平成に入ってからは、これまでの規模を維持するためにも、担い手確保に邁進したが、継続して参加する担い手の確保には至らなかった。今の区役員世代は、そういった渡御祭を経験しており、普段の村落運営でも人手不足を実感しているため、渡御祭の語りにおいても、内容としては過疎化に苦しむ上横田の現状になることが多い。集合的記憶の持続は「集団が存続する期間に限られている」〔アルヴァックス一九八九：一〇〕ため、今後は渡御祭の集合的記憶がどこまで維持され、継承され

るかにかかっている。

「記憶」とは「現在から過去を捉える手がかり」〔藤原二〇〇一：四五〕であり、語られることで記憶は物語として再構築される。岩本通弥は、民俗学が聞き書きや民俗誌を通じて、「記憶」を記録化するのだと指摘している。民俗学は「過去がどう覚えられ（記銘）、意味づけされてきたのか（保持）、そしてどう語られるのか（想起）、個人にせよ集団にせよ、その記憶化の過程」〔岩本二〇〇三：七〕を追究する。本稿における担い手らの語りには、各々の記憶が反映されていて、どの渡御祭を経験したかによって記憶化の過程は異なっている。「記録」は対象を固定化するが、「記憶」は人々の間で対象が想起され、語られる度に再構築される。そして、同じ対象であっても誰が語るかによって異なる様相を呈する。過去の渡御祭の記録は多く残されており、準備で過去の資料や写真を見ることはあっても、渡御祭は「記録」以上に担い手自らの「記憶」に頼って継承されてきた。そして、担い手たちの間で異なる渡御祭の語りがなされるのは、経験してきた渡御祭の違いが表れているからであり、「記憶」には複数性がある。集合的記憶を保持する集団の成員は、時間と共に更新されていく。一人の成員にとって記憶を語ることができるのは、「集団がいつもその継起するイメージの中に自己を認めることができる」〔アルヴァックス一九八九：九八〕ときであり、語ることができる「記憶」は成員それぞれで異なる。集合的記憶も成員が更新される度に、変容しながら継続する。それまでの成員が抱えていた昔の出来事や人物像は、成員の消失と共に忘れられてしまうが、新たな成員が加わり経験を積むことで、集合的記憶は再構築されていく。

渡御祭においては、区役員を中心とした担い手たちが集合的記憶を保持する集団であり、担い手が移り変わりながらも、その度に集合的記憶の構築が繰り返され、現在まで継承されてきたといえる。A氏やB氏の世代からは、当時の社会状況や楽しい渡御祭の語りが聞かれ、今の担い手の中心にある区役員や若い世代に期待する語りであった。一方、区役員を中心とした担い手からは、過疎化の影響を深刻に捉え渡御祭に限らず区の運営そのものの維持を危惧している語りが多かった。経験した世代によって渡御祭がどのように語られるかには世代間の違いがあり、特に区役員を務めている世代の語りからは、日々感じている過疎化の深刻さが浮き彫りになる。

上横田の人々にとって、渡御祭の記憶を語ることは上横田のあり方を語ることでもある。そして、渡御祭の記憶とは、これまで担ってきた人々についての記憶である。だからこそ、語りには多くの住民が登場する。また、それは渡御祭が継続されてきた時間の長さをも示している。そして、近年増えてきた町営住宅の住民が持つ上横田の記憶は、これまで渡御祭を担ってきた住民の記憶とは異なると考えられる。多くの町営住宅の住民は渡御祭を経験していないため、区長F氏が語るように、渡御祭が「自分たちの祭り」である意識を持っているとは考えにくいし、あるいは渡御祭を知らないこともあり得る。ただ、人手が足りない状況において渡御祭を開催することは、町営住宅の住民が新たな担い手になる機会になる。町営住宅の住民が準備から渡御祭に携わる経験をすれば、新たに担い手たちの間で渡御祭の集合的記憶が再構築されると考えられる。渡御祭を開催して集合的記憶を継承していくことは、町営住宅の住民も含め、次の世代が上横田の担い手になっていくことだといえる。町営住宅の住民が上横田に長く暮らし、継続して区の共同作業や渡御祭に携われるかは分からない。ただ、現在は町営住宅の住民も区の共同作業に参加するようになり、少しずつではあるが経験している。過疎化は今後も進むと思われるが、重要なのは、渡御祭に限らず上横田の「記憶」を継承していくことであり、上横田が継続していく鍵になると考える。

第三節　渡御祭と上横田のこれから

当初、筆者は渡御祭を調べるにあたって、町営住宅の住民が新たな担い手になると想定していた。同時に筆者は過疎化が進んでいることを実感しており、七年に一度の渡御祭では準備の度にどのように担い手を確保するか大変であることも予想していた。だからこそ、筆者は、令和三年度の渡御祭はこれまで以上に町営住宅の住民が担い手として期待されると考えていたし、どのようにして彼らが渡御祭を担っていくのかを、実際の渡御祭を通して明らかにしようと考えていた。しかし、コロナ禍で渡御祭は開催できなかった。

中止が決まる前、最初に伺った区長F氏の語りが印象的だった。町営住宅の住民が手伝ってくれることはありがたいし助かったことだが、これからも渡御祭を担っていくのは昔から住んでいる住民であるとの考え、そしてF氏が筆者の想像以上に上横田の過疎化を懸念していることに驚かされた。筆者自身、過疎化が進んでいることも感じており、だからこそ新たな担い手を確保していくべきだと考えていた。だが、今上横田を離れて生活している筆者とは違い、区役員として上横田で暮らしている住民からしたら、過疎化はもっと身近で深刻な状況をひしひしと感じていたのだと思われる。

住民たちの語りからは、渡御祭は「自分たちの祭り」であり、自分たちが担い継承していく祭礼であるとの考えが伝わってきた。住民が渡御祭を語る際には、「〇〇さんが詳しく教えてくれた」「神輿渡御では〇〇さんがこれを担っていた」というように、常に上横田の人が登場する。渡御祭が、現在まで上横田の人たちの手から離れずに、七年に一度の晴れ舞台や楽しみとして存在してきたのだと窺い知れる。渡御祭は、上横田の住民にとって「自分たちによる自分たちのための」祭礼なのである。

近年は町営住宅の住民に手伝ってもらい、担い手を拡大しながら開催してきたが、次の開催まで間隔が開くため、町営住宅の住民が継続して渡御祭に関われることは難しい。入れ替わりが激しく、祭礼が周期的であるがゆえに、「自分たちの祭り」である認識を持ってもらうことは困難だと考えられる。そうであるならば、上横田に長年暮らしている住民にとっては、渡御祭が「自分たちの祭り」である状態のまま終わらせることが、選択肢として生まれたのではないだろうか。

今後も過疎化は進み、渡御祭のみならず、村落運営、自治組織も継承が困難になっていくかもしれない。ただ、D氏のように、上横田は「都市化」しているとも考えられるし、実際にG氏をはじめ町営住宅の住民が区の共同作業に参加し、担い手として活動している。これまでよりも規模は縮小していっても、上横田は記憶を継承していきながら存続していくだろう。

注

（1）男性の敬称、一人前の人。

（2）昭和五三年度の渡御祭の際に、ある上横田の住民が熊野神社の「クマ」を模したぬいぐるみを区に寄贈した。渡御祭ではそのクマのぬいぐるみをリヤカーに載せた。クマのぬいぐるみは現在、上横田公民館内に保管されている。

文献

M・アルヴァックス　一九八九『集合的記憶』小関藤一郎訳　行路社

岩本通弥　二〇〇三「方法としての記憶――民俗学におけるその位相と可能性」同編『現代民俗誌の地平三　記憶』朝倉書店　一－一三頁

金山町　一九九七『広報かねやま縮刷版』第三巻

滝沢三雄　一九九三『ふるさと上横田再発見』上横田老人クラブ

藤原帰一　二〇〇一『戦争を記憶する 広島・ホロコーストと現在』講談社

鏡渭覚書

―近世会津の真言僧と陰陽道―

久野俊彦・小池淳一

文化六年（一八〇九）に成った『新編会津風土記』巻之四十五の和泉田組下山村の項に、「観音寺　小名下村ノ丑寅ノ方二十間ニアリ、真言宗南照山ト号ス、高野山西南院ノ末山ナリ」（『新編会津風土記（第二巻）』、歴史春秋社、二〇〇〇年、二七二頁）とある。観音寺（現在、福島県南会津郡南会津町下山、真言宗豊山派）は、近世には高野山西南院の直末であった。それは観音寺がこの地域においては田舎本寺であったことを意味しており、実際に下山村周辺に末寺を持っていた。

奥会津の中世にさかのぼる聖教典籍類の調査の一環として、この観音寺に伝来した資料群の調査も進めているなかで、陰陽道にかんする書物を数点、見出すことができた。それに携わった僧侶として観音寺六世、鏡渭がいる。この鏡渭について現時点で判明していることを整理しておきたい。

鏡渭は、本寺である高野山西南院に対して「拙僧成立并末寺請状之事」（観音文書）を出している。それには、

拙僧成立并末寺請状之事

一、某生国者、奥州白川領之内須乗村之事

一、説戒導師并四度加行師者先住鏡鑁、更者灌頂者、於會津城下金剛寺道場致執行之事

一、従去年五月五日、先住譲與之上、観音寺住持職相勤申候、依之尋自往古、遇院之本寺又法流之由緒、先師良栄親入政旻法印之御室致、三寶院流之印可血脉相承、于今有之候故、更ニ糺法流之濫觴相續仕度、奉拝懇望申上候處ニ被遊、附法之条旁恩之段粉骨有餘義奉拝候、自今已後如守眼肝猥不可為授与他人候、若於有堪法器欲汲法流之輩者本寺へ遂御断可致傳授之候、今度自先規為當院御末寺之證文致頂戴之罷帰之上者、弥其通不可有相違候、仍為後證如件

奥州會津伊北之内下山村
南照山観音寺
鏡渭

元禄六癸酉年三月廿八日

本寺
高野山
西南院成信法印様

とある。元禄六年（一六九三）、前年、先住の鏡鑁の後を継ぎ住持となった鏡渭が、四度加行を先師より受け、会津若松の金剛寺で灌頂を受け、三宝院流の血脈を相承している、といった自己の履歴を述べ、高野山西南院において末寺としての証文の下付を受けた上でさらに法流を乱さぬことを申し述べている。

なお、先住の鏡鑁については、先に掲げた『新編会津風土記』の下山村下村の末尾に「経塚　小名下村ニアリ、高五尺・周八間、天和二年水災ヲ患テ観音寺ノ僧鏡鑁ヲシテ一石一字ノ経文ヲ書写シメ埋ムト云」とある。「拙僧成立并末寺請状之事」に、先師良栄が政旻法印から三宝院の法流を受けて、観音寺の法流となったと記されている。政旻法印は高野山西南院の近世初頭における院主である。

観音寺には、『簠簋』（宝永七年〈一七一〇〉版）や新出の『簠簋抄』

につながると思われる写本『安部懐中伝暦』の他にも、『簠簋』について真言宗の立場から講釈を加えた『簠簋口傳初心鈔』（元禄四年〈一六九一〉序、版本）が三点伝来している（観音寺聖教 H73・H74・H75）。これらによって、田舎本寺であった観音寺のなかで、陰陽道の修学が盛んであったことがうかがわれる。なかでも上下巻合一冊となっている『簠簋口傳初心鈔』（観音寺聖教 H73）の上巻と下巻の末尾には「鏡渭」の印影があり、下巻末見返しには、朱筆で「旹元禄六癸酉年三月十七日未刻畢　音利房ニテ聞之　鏡渭　卅五歳時」という識語があり、全体にわたってそれほど多くはないが、朱書が加えられている。音利房とは、『簠簋口傳初心鈔』の撰者、盛典（せいでん）の房名であるから、鏡渭は同書の撰者から直接、講義を受けたことになる。

音利房盛典（一六六二～一七四七）については、埼玉県桶川市の『桶川市史（第九巻・補遺編）』（一九九〇年）に、青木忠雄による「音利房盛典―桶川で育まれた真言密教の学匠―」があり、その生涯と著作に関して詳述されている。これによると、盛典は現在の加須市（旧騎西町）の上種足（かみたねだれ）村に生まれ、下野国佐野の大聖院を経て本山で修行し、撰述を行ない、元禄十一年に、現在の桶川の知足院（現、桶川市市下日出谷西）の住職に迎えられた。盛典は本山（高野山、あるいは京都東山智積院）にいた元禄六年に、『簠簋口傳初心鈔』を撰述したのである。

高野山西南院の末寺である観音寺の僧鏡渭は、末寺僧として本山での修行の中で、『簠簋』についても研鑽を積む学僧であった。その際、さまざまな撰述をなしていた音利房盛典のもとで、『簠簋』を学びその口伝を伝授され、その講義録ともいうべき刊行後間もない盛典の撰述書『簠簋口傳初心鈔』を領持し、撰者から直接に講義を受けたことを記した識語を加え、後に会津に持ち帰ったのであろう。観音寺に伝来した『簠簋初心口傳鈔』は、そうした本山での陰陽道の修学の痕跡を伝えるものである。なお、観音寺に残る墓石から、鏡渭は享保六年（一七一七）に没したことがわかる。

鏡渭の手を経たと思われる写本は、近隣である黒谷村（現、南会津郡只見町黒谷）の医家原田家にも伝えられていた。「占星術釈書」（仮題、五星七政二十八宿による占術書）、『錦繡段抄』（仮題）には鏡渭の印が捺されている（『医家原田家書籍目録』只見町教育委員会、二〇一六年、一一三、一四一頁）。これらの写本の紙背に、観音寺の盈伝（玄察、照山鬼道とも）が、『三界記』を書写している。盈伝は『年禽起例』（享保一八年写か）、『二十八宿詩断』といった暦、宿曜にかんする書物を写している（『医家原田家書籍目録』一一二頁）。

また、観音寺聖教の『簠簋初心口傳鈔』（上下巻二冊、観音寺聖教 H74）の巻末には「會津伊北太山」の識語がある。太山は享保十四年（一七二九）に十九歳であった（『三十七尊配位円性私記』観音寺聖教）ことから、鏡渭・盈伝の次世代であろう。鏡渭の世代以降も観音寺をはじめとするこの地域では、陰陽道や暦日への関心が受け継がれたことがうかがえる。

十七世紀末の真言宗において、こうした修学のなかに『簠簋』を中心とする陰陽道の学習が行なわれていたこと、そしてそれは本山での修行を経て、地方の寺院（田舎本寺）にまで伝えられていったことが鏡渭の事績から明らかになった。先にふれた『安部懐中伝暦』についても、こうした宗教環境をふまえて考察を進める必要があろう。同書には、『簠簋口傳初心鈔』と同じく、巻末に鏡渭の印影があり、「占星術釈書」や『錦繡段抄』と筆跡が同じであることから、鏡渭による書写であると推定される。

上野浄名院と令和の八万四千体地蔵

林　京子

1、はじめに

明治九年に東京上野浄名院の住職となった妙運は、明治十二年から八万四千体地蔵建立を開始した。筆者は浄名院の開基である圭海の調査をする中で、妙運の八万四千体地蔵と巡行地蔵を知り、強い関心を持つようになった。ところが、平成の終りから令和にかけて、浄名院と八万四千体地蔵を取り巻く状況は激変した。そこで、その後の浄名院と令和の八万四千体地蔵について報告しておきたい。

2、浄名院の三福殿と巡行地蔵

妙運は「天台地蔵比丘」と名乗り、八万四千体地蔵建立を発願して、明治の中後期に貴賤を問わず熱狂的に帰依された。その詳細は別稿[1]を参照していただきたい。彼は二十代の頃日光の星宮で地蔵信仰に目覚め、千体地蔵建立を発願するが、資金もなく挫折した。その時妙運が資金を得るために取った行動は、日光の外山（とやま）の毘沙門天に財施を願うことだった。後に妙運は浄名院に三福殿（写真1）を建立し、毘沙門天・弁才天・大黒天を祀った。『渓嵐拾葉集』によれば、山門相承の大黒天は多聞大黒で、その容貌は毘沙門の形であると記述される[2]。この記述から連想される三面大黒は、福神大黒天を正面に、左右に弁才天と毘沙門天を配するものである。外山毘沙門堂は本尊を毘沙門天とし、脇侍に弁才天と大黒天を配したものであろう。妙運の八万四千体地蔵建立が軌道にのると、外山毘沙門堂も有名になり、現在も正月には多くの信者が外山毘沙門堂に参集する。

自らの八万四千体地蔵建立の外護者として、妙運がこの三福天を浄名院にも祀った場所が、三福殿である。妙運は「地蔵のお札」を自ら描いて配布し、貰った人は必ず地蔵を建立すると誓うことで、八万四千体地蔵建立という大願を成就させようとした。建立する地蔵はどのような形でも大きさでもよかった。浄名院の何千体もの石地蔵は、小さい箱型の規格で造られたものがほとんどであるが、各地のものは大きさや形態は様々である。ある人は自分たちの墓地に地蔵を作った。また地域の信仰拠点のお堂や道場、妙運と親交のあった寺院などに地蔵を建立する人もあった[3]。

写真１　三福殿

また檀家の無い律院である浄名院が、庶民の地蔵信仰の寺院として大発展したことの大きな要因は、巡行する「伺い地蔵」である。前稿[4]で詳細を述べたように、妙運が律院の内規に従い日光の興雲律院に転住した際、上野の信徒たちは石地蔵を作り、妙運の形見とした。三体の石地蔵が造られ、そのうち二体は各信者宅を巡行した。すなわち家から家へと順送りされた石地蔵を、信者たちは様々な懸案を胸に秘めて持ち上げ、感得されるその軽重で可否・吉凶を占った。石地蔵が軽々と持ちあがれば、地蔵の答えは可であり、心願は叶う。重くて持ち上がらない場合は、地蔵の答えは否であった。石地蔵に伺いを立てることから、地蔵は「伺い地蔵」「お伺い様」と呼ばれた。

一九八〇年代に、浄名院は巡行地蔵を回収し、それらを三福殿に安置

した。その時池袋方面を巡行していた地蔵が消息を絶ったことを、大島建彦氏が報告されている。[5] その後も信徒たちは浄名院の三福殿で地蔵を持ち上げては心願の可否を問うたので、三福殿は「伺い堂」とも呼ばれた。石地蔵は天台地蔵比丘、つまり自ら生き地蔵と称した妙運の分身とされていた。

八万四千体地蔵を建立するのは、ある程度裕福な人でなければ無理だった。が、巡行地蔵は一緒に回ってきた賽銭箱に小銭を入れて拝むだけでよかったと推測され、貧しい家庭婦人でも儀礼に参加することが容易だった。関東を中心に様々な地域で、妙運の伺い地蔵は、人々、特に女性のの信仰を集めた。[6] 石を持ちあげてその軽重で占う石占は、日本のあちこちでよく見られる。狙ってそうなったのか、偶然そうなったのかは不明だが、ある種のイキガミであった妙運と、石占や廻り地蔵という民俗が見事に習合した。俗な表現をすればぴったり嵌まったとも言えるだろう。

生きている地蔵に会いたいという人々の願いが「貧しい法師の体を割いて、生身の地蔵が岩船山に出現した」という霊験譚[7]を生んだ。江戸期の岩船地蔵の巡行や出開帳時の熱狂は、「やってきたこの世の地蔵に会う」こと、つまり生きている地蔵に値遇して結縁したいという素朴な人々の願いの具現化である。浄名院の巡行地蔵は、「この世に留まって人々を導き続ける妙運の分身」と信者たちに理解されていた。この世の地蔵に会いたいという願いは、いつの時代でも、どんな階層の人でも消えることはない。妙運が自ら「地蔵比丘」と名乗ったことは「生き地蔵」となって菩薩行・慈悲行を続けるという不退転の決意であろう。それゆえに妙運の死後もその分身の巡行地蔵は歩みを止めなかった。出合うことで結縁することができる「この世を歩き続ける生き地蔵」だったからである。

巡行地蔵が安置されてから約四十年が経過した二〇一九年、「三福殿」の名や意味は忘れられ、「伺い堂」とのみ呼ばれるようになったお堂は、一年に一度、旧暦八月の満月の日の「へちま加持」の時のみ開放されていた。「へちま加持」についての詳細は別稿[8]を参照していただきたい。毘沙門天・弁才天・大黒天がそれぞれ祀られていたと思われる三福殿は、この時点では、前の間（ま）は寺のお守りやグッズを販売する場所、中の間は八十年代に浄名院が回収したり、信者たちが浄名院に戻した伺い地蔵たちを安置する場所、奥の間は預かり仏の置き場所になっていた。筆者が調査した際、「へちま加持」は賑わっていたが、「お伺い様」にもお参りをしたのは筆者のみだった。

浄名院に戻ってきた地蔵たちの中には、人の手で撫でさすられて磨滅し、表情もよくわからない地蔵もあった。どの地蔵も、もはや石なのか金属製なのかもわからないほど黒光りし、かつての信仰の篤さを示すように、袈裟や赤い涎掛けで幾重にもくるまれ、手作りの座布団の上に静かに鎮座していた。

3、その後の三福殿と妙運の地蔵のお札のゆくえ

二〇二一年の三月ごろに三福殿は取り壊され、更地にされた。（写真2）三福殿の地蔵の間に安置されていた巡行地蔵たちは、本堂の内陣の右隅に置かれてしまい（写真3）、参詣者が地蔵を持ち上げることはできなくなり、ある種の「展示物」となってしまった。筆者はこの地蔵たちに寄せられてきた篤い信仰の歴史を思い、愕然とした。かつて日本中を席巻した素朴な信仰を衰退消滅させたのは、信者の高齢化であった。

ところが、拙稿[9]でも報告したように、二〇二〇年の夏、かつて池袋方面を巡行し、消息を絶った巡行地蔵（の分身）が、突然岩船山高勝寺（栃木市岩舟町）に帰還した。岩船山こそ、妙運が、八万四千体地蔵建

写真２　更地になった三福殿

写真３　浄名院本堂に遷座した伺い地蔵たち

立運動の全国展開の最初の一歩を踏み出した地であった。現在の関係者が誰一人岩船山と妙運の因縁や巡行地蔵のことを知らないのに、巡行地蔵が高勝寺本堂に遷座したのは、翌年には三福殿が消滅することを見通しての行動だったのではないか。ふとそのような妄想が脳裏をよぎるほど、三福殿の消滅は筆者にとっては衝撃的だった。

また一九八〇年代には残存していた妙運の番号の入った地蔵のお札であるが、二〇二一年十月には配布終了済となった。ただ浄名院では「地蔵のお札」（妙運の地蔵が描かれ、番号はない）の頒布は継続している。

さらに浄名院の中を観察すると、空襲や経年劣化でひどく損傷していた地蔵や、寺域を区分する塀が片付けられ、そのスペースに様々な大きさの墓石が多数分譲されていた。一般的な墓もあったが、高さ四〇センチ弱でカロート部分がない墓石もあった。おそらく遺骨そのものは浄名院さくら霊園の納骨堂に納骨されており、モニュメントとしての設置と推測される。それらの側面には、番号の入った妙運の地蔵が彫られていた。さくら霊園が妙運と八万四千体地蔵のことをホームページに掲載していることを考えると、おそらく分譲する「墓石」にデフォルトで番号と地蔵が付属していると思われる。番号入りのお札はさくら霊園の利用者に配布されているのだろう。檀家の無い律院であった浄名院と妙運の事蹟が未来に継承されるためには、時代に合わせた変化が必要である。その体裁はかつてのものとは異なるが、これらは時代が令和になっても建立され続ける八万四千体地蔵なのである。

4、八万四千体地蔵建立の意味とはなにか

インドのアショカ（阿育）王は釈尊の身真舎利を納めた八万四千塔を造り、諸国に分配したとされる。かつて源頼朝、実朝、その後の鎌倉将軍らによって日本でも八万四千塔供養が行われた。[10] 八万四千塔供養は施主が自らを阿育王・中国皇帝になぞらえて行う供養なので王権の象徴とも言えるものであったが、数万人にも及ぶ源平の内戦の死者の怨念に対する怨親平等の鎮魂儀礼でもあった。[11] その後も日本では権力者が交代する度に、鎮魂の仏教儀礼が新しい政権によって行われてきた。

しかし日本の仏教治国の伝統は、明治維新により一変した。妙運は伝統的な持戒の聖でもあった。中世以来、戒にはある種の呪術的な力があると理解され、真言律にせよ天台律にせよ、持戒者は貴賤を問わず人々を救済し、その一部は戒の力で社会事業を推進した。[12] 妙運は伝統的な天台教学を継承して布教しつつ、教団のトポスから逸脱して捨世僧的な「地蔵比丘」（＝生き地蔵）を名乗り、文字化できない呪術的な宗教実践を展開した。彼の八万四千体地蔵建立とは、本来為政者の役目である幕末の内戦や西南戦争、後になると日清戦争の死者や頻発する疫病や災害の死者をも対象として鎮魂し、生き残った者を滅罪招福する儀礼を、仏教を捨てた国家に代わって自ら地蔵となって行うという、凄まじい代受

苦の具現でもあった。

またかつて挫折した千体地蔵ではなく、「印度の阿育王の八万四千体塔建立」を再現しようとしたことは、妙運が属する天台安楽律派が、宋代の天台宗を理想として近世独自の展開を示し、釈尊を憧憬して小乗戒の実行を求めたこととも関連していると思われる。政府の宗教政策が迷走し末法の極みとなった「今（明治十二年）」ではなく「釈尊の正法の時代」を指向していることからも、妙運もまた、多くの「近代仏教者」[13]たちが仏教の始原を求めインドを指向した近代という時代の子であったと言えるだろう。

林竹二は足尾銅山鉱毒事件の被害者救済に奔走し、谷中村の人々と行動を共にした田中正造について、

前近代の世界で達成されたもっともすぐれた精神をもって近代を切り開くのでなければ、近代精神とはついに根なし草であろう。

と評しているが[14]、この言葉は近代仏教者である妙運にこそ強くあてはまるだろう。妙運は多くの御詠歌や短歌、漢詩、法話などを書き残したとされるが、それらはほとんど現存していない。皮肉なことに、妙運の信者たちは妙運をある種の生き仏、イキガミとして強く帰依したが、文字化された彼の思想や教説に関心を持つ人は少なかった。現在、釈雲照、前田誠節などをはじめとして近代仏教者の研究が盛んであるが[15]、あまりにも文字史料が少ないため、妙運が研究者から顧みられることはない。

5、令和の八万四千体地蔵岩船山に建立される

二〇二二年の春彼岸に、岩船山に妙運の八万四千体地蔵が建立された。（写真4）筆者は情報を得て、地蔵の開眼供養に立ち会うことができた。施主は縁者の供養のために地蔵建立を発願したとのことで、岩船山内にいくつかある八万四千体地蔵と同じ、石板に妙運の地蔵のお札の複写を彫り、番号を八万四千余としてあった。たまたま相談した石屋にインドの石があると言われたので即決し、高勝寺に地蔵を設置したい旨を相談すると快諾していただけたと言う。

彼岸明けの春の日の本堂での開眼供養の読経が終った時、本堂内には轟音が響き、少し揺れた。まさしく「そのとき地蔵、ゆるぎでて」という賽の河原和讃の通りであった。施主は縁者が地蔵によって救済されたと喜び、そのようなことに慣れた高勝寺だからか住職[16]と副住職は淡々と法要を続けた。法要が終了し、一同が本堂から外に出ると、法要が始まるまではつぼみだった境内のたくさんの桜が一斉に開花していた。一面の桜の花で覆われた境内は、あたかも極楽浄土の光景のようだった。

伺い地蔵の遷座といい、八万四千体地蔵の開眼供養時の振動といい、妙運は、令和の今もインパクトのある霊験譚を産み出す力を持っている。浄名院の巡行地蔵や三福殿のその後、岩船山の令和の八万四千体地蔵も、成文化しておかなければそのうち詳細不明となるばかりである。拙い駄文であるが、関係者の供養になれば望外の喜びである。

写真４　岩船山に建立された八万四千体地蔵

注

（1）拙稿「上野浄名院の「うかがい地蔵」の巡行と「生身の地蔵」」『西郊民俗』二五一、二〇二〇年。

（2）佐伯英里子「厚木市妙傳寺蔵「弁財天十五童子像」小考」『日蓮仏教研

究』一三、二〇二二年。
(3) たとえば地域の人々の信仰の場であったが明治維新で廃寺になり地蔵堂のみ残った取手市新木地蔵院にも複数の八万四千体地蔵が建立されていることを近江礼子氏が「我孫子市史研究センター・会報二三一号」で報告している。
(4) 拙稿「「伺い地蔵」の帰還—上野浄名院の巡行地蔵のその後と岩船山高勝寺の「お尋ね地蔵」」『西郊民俗』二五五、二〇二一年。
(5) 大島建彦「浄名院のうかがい地蔵」『西郊民俗』九七、一九八一年。
(6) 妙運は安楽律の律僧であった。日光の興雲律院にも八万四千体地蔵でもある「伺い地蔵」があり、大津市坂本の安楽律院の末寺である同所の宝林寺にも同じく八万四千体地蔵の「伺い地蔵」がある。興雲律院には明治初期の女人講の石塔が現存する。また宝林寺の「伺い地蔵」は安楽律院末寺の尼寺が廃寺となったために宝林寺に遷ったものである。このことは持戒僧と女性の信仰との関りを強く暗示するのではないか。
(7) 根津美術館蔵『地蔵菩薩霊験記絵』には「貧しい法師の体を割いて出現する生身の地蔵を岩船山で拝する」物語と絵が収録されている。胤海『下野州岩船山縁起』、常玄『岩船山地蔵菩薩縁起』(以上高勝寺蔵)『地蔵菩薩霊験記絵』『一四巻本地蔵菩薩霊験記』などにも岩船山での生身の地蔵出現の物語が収録されている。
(8) 前掲　注1。
(9) 前掲　注4。
(10) 西山美香「鎌倉将軍の八万四千塔供養と育王山信仰」『金沢文庫研究』三一六、二〇〇六年。
(11) 大山喬平「鎌倉幕府の西日本御家人編成」『歴史公論』五-三、一九七九年。
(12) 末木文美士「戒律の意味—生活規律から呪力へ」松尾剛次編『戒の巻』春秋社、二〇〇六年、一七五頁。
(13) 佐藤哲朗『大アジア思想活劇』サンガ、二〇〇八年を参照されたい。
(14) 林竹二「抵抗の根　田中正造研究への序章」『田中正造　その生と戦いの「根本義」』田畑書店、一九七七年。
(15) 釈雲照については亀山光明『釈雲照と戒律の近代』法蔵館、二〇二二年、前田誠節については藤田和敏『悲劇の宗政家前田誠節』法蔵館、二〇二一年を参照されたい。また、近代仏教全体に目配りするものとしては大谷栄一他編『増補改訂　近代仏教スタディーズ　仏教から見たもうひとつの近代』法蔵館、二〇二三年があり、大谷氏、オリオン・クラウタウ氏ら多くの研究者によって盛んに研究が進められている。
(16) 住職によると、高勝寺の参詣者が様々な怪異(特に電子機器が突然作動停止する、光る物体が飛ぶなど)を感じたり、怪異の相談に来ることがよくあるらしい。

普美地蔵を尋ねて

清水邦彦

論の都合上、私事から入る。筆者は東京都立板橋高校の卒業生である(一九八四〈昭和五九〉年卒業)。当時、板橋高校の近くには地蔵像があった(板橋区向原一丁目一)。この地蔵像の前を筆者は通学していた。高校を卒業してだいぶ経ってから分かったことだが、地元では雨乞い地蔵と呼ばれているものである。[1] 若干移転はしたが、[2] 現在も地元の人々によって祀られている。[3]

この地蔵像とは別に近隣の豊島区要町三丁目交差点付近に普美地蔵という地蔵がかつて祀られていたことを知ったのは二〇一〇(平成二二)年頃であった。豊島区立郷土資料館『女性の祈り』(豊島区教育委員会、一九九三年)に以下のようにある。

> 普美地蔵……この地蔵はもと要町三丁目バス通りに西面して祀られていた。……一九八三(昭和五八)年地下鉄有楽町線の開通工事の際移転され、その後消息不明であったが、練馬区の林宗院に預けられていたことがわかった。(五三頁)

三吉朋十『武蔵野の地蔵尊　都内編』(有峰書店、一九七二年)には普美子地蔵として以下のようにある。[4]

> 普美子(ママ)地蔵と霜田橋地蔵[5]　豊島区要町三丁目……要町三丁目の路傍

に、西面して一宇の雨屋があり、屋内に「光明真言男女講中六十人享保五年十月十五日建立」と彫り、丸彫り、立高一メートルの地蔵が安置され、その名を〝普美子(ママ)地蔵〟と名づける。……その頃、この地域に豪農の娘に普美という一女がいたが、夭死をしたのを、喜与という父が願主となり、この一尊を造立した。……（三三頁下段）

普美地蔵なのか、普美子地蔵なのか？東京都豊島区教育委員会編『豊島あちらこちら―文化財資料を探る　第五集』（豊島区教育委員会、一九七六年）には以下のようにある。

普美地蔵　所在地　要町三－二三……（十一頁）

『武蔵野の地蔵尊　都内編』（前掲）には時に誤りがあるため、普美地蔵が正しいと解釈される。

『女性の祈り』（前掲）によれば、普美地蔵は、一九八三（昭和五八）年、地下鉄有楽町線開通工事のため、練馬区練馬四丁目二六の林宗院[6]（浄土宗）に移されたとされる。当時、高校生であった筆者の記憶によれば、一九八三（昭和五八）年初頭には有楽町線工事に伴う道路拡張工事はおおよそ終わっており、移転はそれ以前かと思われる。一九八三（昭和五八）年は地下鉄有楽町線の当該箇所（池袋駅―地下鉄成増駅間）が開業した年である。『女性の祈り』には林宗寺無縁墓地における普美地蔵の写真も掲載されている（前同）。

そこで、二〇一〇（平成二二）年以降、何回か林宗院を訪れ、僧侶にも聞いてみたのだが、普美地蔵の所在は確認できなかった。

二〇一九（令和元）年になって、ふと思い立ってGoogle検索を行ったところ、ヒットしたのである。東京都豊島区長崎一丁目十五にある「LIXIL不動産ショップ　アイビーハウジング」という不動産屋のHPである。HPの画像を見ると、確かに普美地蔵であった。HPには以下のようにあった。[8]

普美地蔵

出身地　東京都豊島区千川[9]……良い家やお部屋が決まるように手を合わせるお客様も多くいらっしゃいます。先代が「石の設計」に携わっておりましたのでそのご縁でお預かりすることになりました。豊島区の豪農（喜与）が建立。……豊島区要町三丁目バス通りに祀られていました。昭和五八年（一九八三年）地下鉄有楽町線の開通工事の際に移転し練馬区のお寺に無縁仏として預けられていましたが平成六年ごろに当社内にお祀りされました。亡くなられた娘さんの為に建立され、特に女の子さんの成長を守るお地蔵様です。

平成六年は一九九四年にあたる。以上の記述を目にし、二〇二〇（令和二）年初頭に同不動産屋を訪れようと思ったが、新型コロナの関係で一旦延期、同年九月にお伺いした。確かに店内に普美地蔵は祀られていた。店員さんにお話を聞いたが、HP以上のことは分からないということであった。店内に祀られるようになってから二〇年以上を経過していることもあり、やむを得ないことである。

「LIXIL不動産ショップ　アイビーハウジング」にて祀られる普美地蔵。2020年（令和２）９月撮影。

『女性の祈り』（前掲）は、一九九三（平成五）年に行われた豊島区立郷土資料館による展示の図録である。展示の際、普美地蔵堂が再現されている。[10] このことを機縁に翌年、林宗院から「LIXIL 不動産ショップ アイビーハウジング」に移された可能性が高い。

豊島区要町三丁目に祀られていた普美地蔵は、一九八〇年代初頭、地下鉄有楽町線開通工事およびこれに伴う道路拡張によって、一旦、練馬区練馬の林宗院無縁墓地に移された。その後、一九九四（平成六）年頃、豊島区長崎の「LIXIL 不動産ショップ　アイビーハウジング」に移され、現在に至るまで、店内に無事祀られている。詳しい事情は不明ながらも普美地蔵が無事祀られていることを確認できた。

＊筆者による突然の訪問に丁寧に対応してくれ、さらに、本拙稿の雑誌掲載を快く了承してくれた「LIXIL 不動産ショップ　アイビーハウジング」に深く感謝する。また、筆者による数回の問い合わせに真摯に対応してくれた林宗院にも深く感謝する。

註

（1）もともとは千本塚にあったことから千本塚地蔵とも呼ばれている。板橋区教育委員会社会教育課文化財係『石仏』（板橋区教育委員会、一九九五年）五四頁上段。現在の台座にも「千本塚地蔵尊」とある（二〇二〇（令和二）年九月筆者確認）。現在の像については註3参照。

（2）一九八二（昭和五七）年頃においては都道四二〇号東側に祀られていたが、現在は西側に祀られている。いずれも向原一丁目一である。かつて祀られていた場所は都道四二〇号の一部となっている。

（3）ただし、現在の像は、二〇〇〇（平成一二）年に再建されたもの。いたばしまち博友の会編『板橋の史跡を訪ねる』（いたばしまち博友の会、二〇〇二年）五五頁下段。

（4）霜田橋はかつて谷端川に架かっていた橋。谷端川は一九六二（昭和三七）年頃に暗渠になっている。

（5）霜田橋地蔵（霜田地蔵とも）は現在、豊島区千早一丁目二三の地蔵堂内に祀られている。横山「豊島をさぐる　その三」（豊島区立郷土資料館『かたりべ』第四三号、一九九六年）および筆者による現地調査（二〇一〇〈平成二二〉年九月）。

（6）住所は練馬区練馬だが、もより駅は地下鉄大江戸線豊島園駅である。

（7）関東大震災により浅草から集団移転した、田島山十一ヶ寺の内の一ヶ寺。十一ヶ寺の中に、そば喰い地蔵で有名な九品院がある。そば喰い地蔵については、長沢利明『江戸東京ご利益事典』（笠間書院、二〇二一年）二六二～二六三頁参照。

（8）現在は削除されている。

（9）普美地蔵がかつて祀られていた場所は前述の通り要町三丁目だが、現在では地下鉄有楽町線千川駅の近くに当たるため、このような表現が取られたと推測される。

（10）豊島区立郷土資料館『豊島区立郷土資料館研究紀要』（第八号、一九九四年）六頁。

雑報

月例談話会

毎月第三日曜日に行われております月例談話会は、当面は申し込み制といたします。参加申込は、会のホームページをご覧願います。変更等、逐次ご確認願います。

第八三五回　令和五年六月一八日

日本と中国の端午の「浄化力」について　史　乃琛
『熊狩雑記』掲載の只見町の狩りの巻物と修験の関わり　久野　俊彦
陰陽道を展示する―民俗篇―　小池　淳一
箕作りの村、戸隠中社門前　榎　美香
「よふし」とヨウシの研究小史　榎本　直樹
信濃町の現状（五）　大島　建彦

第八三六回　令和五年七月一六日

お札撒き―横浜市戸塚区戸塚八坂神社―　畠山　豊
日本と中国の端午の「浄化力」について（その二）　史　乃琛
銚子の「阿弥陀欲参日記（仮）」について　林　京子
陰陽道を展示する―安倍晴明篇―　小池　淳一
「粟おし」と「しなおし」　榎本　直樹
咳のじじばば　大島　建彦

第八三七回　令和五年八月二〇日

関東以西の麦打ちと籾打ち　榎本　直樹
白子観音寺奇談　林　京子
只見町梁取の虚空蔵菩薩像　久野　俊彦
弓削道鏡と道祖神　大島　建彦

『西郊民俗』バックナンバーのＰＤＦ掲載

ホームページに会誌『西郊民俗』ＰＤＦの掲載を始めました。『西郊民俗』バックナンバーのページで、該当号の「ＰＤＦ」をクリックすると、表示されます。第二五八号から掲載を始めます。会誌刊行の一年後に順次掲載します。著作権は執筆者に帰属します。個人の研究目的の範囲でご利用ください。

問い合わせ先

会務担当（会誌送付・入退会・談話会等）
榎本直樹　〒350-1123　埼玉県川越市脇田本町二六－六　ドルチェ川越四〇九
Ｅメール　inari@ceres.ocn.ne.jp
編集担当（原稿送り先）
久野俊彦　〒329-0433　栃木県下野市緑四－六－七
Ｅメール　hto4sano@yahoo.co.jp

西郊民俗　第二六四号
令和五年（二〇二三）九月十七日
〒一一二－〇〇〇五
東京都文京区水道二－三－一五－四〇三　小池方
西郊民俗談話会
振替口座　〇〇一八〇－二－八九四四〇